

王舍城の悲劇。言わずと知れた阿闍世王子によつて父・頻婆娑羅王と母・韋提希夫人が幽閉されてしまう『觀無量寿經』の導入部を彩る物語である。これを大字の講義で取り上げて解説した際、学生から印象的な感想文が寄せられた。端的に述べると「悲劇」というほどの内容に感じられません」というものだ。

ふむ。確かに経典の叙述部分だけでは誰ひとり死者もなく、阿闍世が怨みを抱く理由もほとんど説明されていないので、悲劇性にやや乏しいところもある。

物語の筋書きを書き出すと次の通り。(1)阿闍世が提婆達多にそそのかされて父王を牢獄に閉じ込める、(2)夫人の秘密裏の差し入れと目連の説法のおかげで王は生き長らえる、(3)不審に思った阿闍世が門番に尋ねて事が露見し、夫人はわが子阿闍世に殺されそうになる、(4)家臣の懇願によつて剣を收めるが、夫人も城内の奥深くに幽閉されてしまう、(5)憔悴しきつた夫人は靈鷲山に向かつて目連・阿難を遣わしてくれるよう助けを求めて礼拝する、(6)思いがけず釈尊当人が目前に姿を現したことで、夫人は自身の首飾りを引きちぎり(自絶瓔珞)、地面上に倒れ込んで号泣する、(7)釈尊に対して「私が一体どんな罪を犯したからこのような悪人を生んでしまったのでしょうか。どうしてあの憎き提婆達多が釈尊と従弟同士なのでしょうか?」と思いのだけをさらけ出す、(8)夫人は苦しみのない世界への往生を求めて極楽浄土を希望する、(9)釈尊は願いに応じて極楽浄土へ往生するための修行法を示し、主題の説法(十六觀法)へと展開してゆく。

工藤量導

自殺志願者が線路に飛び込むスピードで
僕は部屋を飛び出しました
目に映るものすべてをぶつ壊してやりたかったけど
そんな時でも一番お気に入りのTシャツを着てきた自分が
バカバカしくて……

(野狐禪「自殺志願者が線路に飛び込むスピード」より)

微風

風

吹

動

くどう りょうどう 1980年青森県今別町生まれ。青森教区本覚寺副住職。博士（仏教学）。浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師、淑徳大学兼任講師。専門は中国浄土教、著書に『迦才』『浄土論』と中国浄土教—凡夫化土往生説の思想形成』（法藏館、2013年）など

のあり様は現在も過去も変わらず、洋の東西も問わないものである。

ここで重要なのは仏の前にあってこそ夫人が自身の弱さや本音をさらけ出せたことだろう。そうして、お気に入りの首飾りを引きちぎったその瞬間から堰を切つたように夫人の感情が溢れ出して止まらなくなり、その赤裸々さは⑦の釈尊への悪態ともいうべき言葉となつて表出す。釈尊はその問い合わせにあえて言い訳もせず、ただひたすらに受け止めた。仏といえども、起きてしまった事実を捻じ曲げることはできないのだ。善導もまたこの点には無縫な解説を加えない。

もしここで想いを吐き尽くしていなければ、夫人は次のステップに移ることができなかつただろう。釈尊がその前で泣くことを許してくれる、悲しみを吐露せずにいられない存在であつたことを象徴する重要な場面なのだ。自暴自棄になり、止まつたまだつた夫人の時計もようやく新たな時を刻み始めてゆく。自らを赦し、耐えがたき苦の事実を抱えたまま生きてゆく決心がついたのだ。

想像をたくましくすれば、善導もまた仏を熱烈に求め、ついに面前した特別な時間を過ごす中で、夫人と同じように、着飾つた自意識のバカバカしさを敏速に引きちぎる改悛をなし、思わず人には言えないような本音をぶちまける情けなさを経験していたのではないだろうか。「自絶瓔珞」というわずか四字の経文に対する的確な解説のすごみにそう感じずにはいられない。夫人の取り乱した物言いにあえてコメントしなかつたのも、善導の無言の共感であつたのかもしれない。

中国や日本では右の物語の前段として、阿闍世の出生説話を加えるのが通例であり、とりわけ民衆に向けた経典講釈の名手であつた善導大師（以下、敬称略）の解説による影響が色濃い。実は阿闍世の前世は父王が派遣した使者の手によつて殺された山中の仙人であり、王への復讐を誓つて息絶える。夫人はほどなく懷妊するが、生まれてくる子はいずれ王の命を脅かす存在になると占い師に予言される。王は迷つた挙句、生まれたばかりの阿闍世を高楼から地に落として死なせることにしたが、地に落ちても小指を損なつだけで命に別状はなかつた。この出生の秘密は後に提婆達多によつて当人へ暴露される。以上の因縁から、古くはこの悲劇の一部始終を「未生怨因縁譚」（誕生前からの怨み）と通称した。

個人的に善導の解説で思わずうならされたのは、⑥の場面で夫人が首飾りを引きちぎつたのはなぜかという点である。それは夫人が幽閉されてもなお自らを飾り立てるアクセサリーへの執着心を残していたことに気づかされたからであり、我を失うほどの羞恥心で一杯になつて仏の前で号泣したという。さらに善導は夫人の置かれた状況について、長年連れ添つた王の余命がいくばくもないこと、自身に仏法を聞くような精神的な支えがしばらくなかつたこと、幽閉に伴つて生きる望みが皆無で死を選ぶことだけを考えて絶望していた、と説明している。

善導が指摘するように、夫人は気持ちを打ち明けられる身近な人が次々と失われてゆく圧倒的な孤独の中でもがき続け、打ちひしがれていたのだ。その苦しみ